Rethink Education from the Perspective of Care

Yayo Okano

教育から、世界への「学び」へ——ケアから考える

岡野八代

「勉強」と聞いても食指が動かない。ちっとも楽しそうじゃない。そう思ってしまう原因が教師から一方的に教え込まれる学校教育にあるのだとしたら—。どうすれば「学ぶこと」の喜びを取り戻すことができるだろうか。そもそもなぜ私たちは学ばなければならないのか。近年耳目を集める「ケア」の理論に詳しい岡野八代氏による論考から、教育の本質について考える。

岡野八代＝文
Text by YAYO OKANO

一方的に教え込む「学校教育」と歩みを共にする「education」

いま日本で、教育という言葉でわたしたちが連想するのは、間違いなく学校「教育」であろう。さらに学校という言葉で連想されるのは、教壇に教師が立ち、狭い教室に一列に並べられた机といすにじっと座って、その教師の言葉に耳を傾ける、授業・講義のあいだは無駄口をしない、まわりに迷惑をかけない、そうした場面ではないだろうか。大学の講義となればなおさら、私立大学に通ったわたしの経験からすると、大教室のため教授の顔も見えない、当時は講義中、先生たちは板書をしていたが、それすらほとんど見えない。ただひたすら教授の話を書きとる、そんなイメージが学校から連想されてしまう、「日本の」教育の姿だ。

「日本の」とあえてここで強調するのは、教育という言葉の語源を探っていくと、日本でイメージされる学校教育はじつは教育のほんの一部であり、むしろ、英語のeducationの語源を探っていくと、ケア（個別のニーズに応答する実践）に近いニュアンスがあることが分かってくるからだ。教育という日本語にもそもそも、「教える・育てる」という異なる意味が込められていることからも、教えるが含意する、より多くの知識を持つ者が一方的に教えを垂れる、つまり上から下に教え込むといったイメージは、教育の一面であることが分かる。教育のなかでも、育てるという意味を重視すれば、一方的に教え込むよりも、むしろその子の能力に合わせて、歩みを共にするというイメージが湧いてくる。さらに、educationを、その語源となるラテン語educereまでたどってみると、educereは、ex（外へ）という意味とducere（引き出す）という言葉からできており、むしろ「育てる」の意味に近い。つまり、その人の内に潜在しているものを引き出し、成長させていくという意味が込められている。

「画一的」で「一方的」な近代教育の限界と弊害

日本語だけをみると、上から一方的に倣わす、といった含意から教育は逃れられないように思われるが、その傾向にさらに拍車をかけているのが、じっさいわたしたちが経験してきた日本における学校教育だといっても過言ではないだろう。多くの専門家たちは、日本における教育制度が、画一的で、誰もが同じに扱われることが平等で、個々の学生の特性やニーズに合わせるというよりも、とにかく一斉に、同じペースで、

同じようなやり方で「やらせる」といった形をとっていることを批判してきた。明治期に近代教育が始まって以来、基本的には改革されることがないこうした日本での教育のあり方は、もはや限界にきているとさえ指摘されて久しい。

上から一方的に画一的なことを教え込まれる教育の弊害は、学校のなかでは学ぶことの意味を子どもたちが見いだせないといった形で表れている。また、大学教員であるわたしの経験からも、分からないことに出会った時がさらなる学びの機会であるといった、学ぶ楽しさを経験していないことが、大学での自主的な学びへの障碍にもなっていると思われる。

こうした日本の特徴は、近代教育が明治期に導入されたさい、国家が目標にした富国強兵を支えるための国民づくりが目的であったことに起因している。体育は軍人の身体づくりのために導入されたが、戦後75年以上たった今でも、その影響力の根強さに驚かされる。戦後の高度成長期にはなお、大量生産大量消費といった産業のあり方を支えるために、上司の命令に従順で、企業側の要請を教え込めるような耐性を子どものうちからつけさせようという目的に合っていたのかもしれない。そう考えると、今なおこうした学校教育が続けられているために、「ブラック企業」が後を絶たないだけでなく、90年代以降、欧米において進められた情報革命の下での産業構造の大きな変革に日本は大きく後れをとったというのは言い過ぎであろうか。

ただ、こうした学校教育の弊害から、むしろ教育本来の姿、すなわち、個々人に備わる潜在能力を引き出すという意味での教育への関心も高まっていることも確かだ。

教育を考えれば
ケアにぶつかる

ここからは、近年注目を浴びているケアという観点から、学校から離れて教育そのものについて考えてみたい。先ほどすでに、ケアを「個別のニーズに応答する実践」と定義しておいたが、ケアは、女性たちの社会的地位の低さの原因を考えるなかで、女性たちが無償で家庭内で担っていた育児から見いだされた実践である。育児と教育は、共に「育む」という言葉を含んでおり、また education を「子どもあるいは幼い人びと、動物を養い育てるプロセス」と第一に定義するオックスフォード英語辞典からも、共通した特徴がある。しかしここでは、その違いを際立たせるために、より深くケアの特徴を、アメリカのフェミニスト政治理論家であるジョアン・トロントのケア論を参照しながら描いてみたい。彼女のケア論の第一の特徴は、子育てを中心にするのではなく、人間の活動一般として捉えていることにある。少し長いが、その定義をここに記しておこう。

〈もっとも一般的な意味において、ケアは人類的な活動であり、わたしたちがこの世界で、できるかぎり善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動を含んでいる。世界とは、わたしたちの身体、わたしたち自身、そして環境のことであり、生命を維持するための複雑な網の目へと、わたしたちが編みこもうとする、あらゆるものを含んでいる〉（ジョアン・トロント『ケアするのは誰か?』岡野八代訳、白澤社、2020年、24頁）。

この定義には、経済活動も政治活動も含まれるのだが、本エッセイの関心から、自分自身へのケアについて考えてみよう。ケア論によれば、わたしたちは、この世界のなかで生きており、誰かの世話を通じてそのニーズが満たされ、こうして自分自身をケアできる存在となり、今もまた、何らかのニーズを抱えていたり、誰かの・なにかの

ケアの視点は、ひとは、それぞれ異なるニーズを抱え、
その一生のうちで　必ず　誰かの　世話・ケアを必要とする
という事実から出発する

ニーズに応答しようとしたりする存在である。ニーズとは、必要としているもの、つまり現状において欠けているもの、という意味である。したがって、ケア論を支える人間観によれば、人間存在はニーズからは自由になれず、つねになにか・誰かを必要としている。

（とりわけ日本における）教育は子どもの個性に拘らず、同じように扱い、（経済的に）自立した存在にしよう、競争社会でも生き延びられる力をつけようとすることに傾斜してきた。他方でケアの視点は、人は、それぞれ異なるニーズを抱え、その一生のうちで必ず誰かの世話・ケアを必要とするという事実から出発する。そして、ケアの目的は、人それぞれが抱える個別具体的で状況によって変化するニーズを、よりよく満たすことである。すなわち、人によって異なるケアが必要なのだ。

育児経験から抽出されたことからも理解できるように、ケアする者とケアされる者との関係はつねに非対称的であり、いっけんすると教育関係にも似ている。しかし、決定的に異なるのは、ケアする者――たとえば母――にとって、ケアされる者との関係は、つねに新しく、ケアされる者がなにを欲しているのかを、予め知らないという点だ。現在日本において女性がその生涯で産む子どもの平均数は一人、ないし二人であることを考えれば、つねに女性は新しい環境のなかで、新しい子に出会い、ある意味で暗中模索の子育てを経験している。そうした経験に、わたしたちの学びも重ねてみると、教育とは異なる学びの意義が浮かび上がってくる。それは、集団教育とはかけ離れた、それぞれの個に向かいあう、注視・関心・配慮・責任といった極めてきめ細かい実践である。一言でいえば、わたしたちに立ち止まりを要請するような実践なのだ。

「より善く生きる方法」を探る営みとしてのケア＝教育

トロントは、ケア実践を四つの局面――関心を向ける・配慮する・ケアする・ケアを受け取る――に分けて考えようとする。その一つひとつの局面において、わたしたちは、予想もしない新しいものと関わることになる。

第一に大切なのは、ニーズを見極めることである。〈わたし〉に今欠けていることはなにか。この問いは、先ほどのトロントのケアの定義からすると、途方にくれるほどの大きな問いである。世界のなかで、より善く生きるために、わたしに必要なものはなにか。こうした問いかけのなかで、自分に関心を向けることは、日々の仕事に追われるなかでなかなか難しい。わたしに今欠けているもの一つとっても、自力でも、近しい人の手を借りても、あるいは社会を動かしても、満たされるかもしれない。自分の問題として解決できたとしても、それは最善とは限らないかもしれない。かといって、社会的に解決するためには、さらに多くのものが足りなくなるだろう。あるニーズに関心を向けることで、わたしたちは、多くの足りないもの――自分の知識だけでなく、人との関わりや資源も――を学ぶ。そう、ケアとはこの意味でも学びであり、もっともよく知っているはずの自分も、世界のなかではまるで見知らぬ他者のようにも感じられる。

第二に、ではいったい誰がそのニーズを満たす責任を果たすのかが配慮されなければならない。自分に足りないものを満たすのだから、それは当然自分の責任なのだろうか。日本では、絵画をみるにも音楽を聴くにも本を読むにも、ほとんどの場合お金がかかる。しかし、公立美術館の入館料については無料化を求める議論も多く、現在イギリスなどでは国立館は全面無料化されている。図書館もデジタル化などで共有の仕方をさらに工夫できるかもしれない。音楽や演劇にしても、公共の場でのフェスティバルなどもっとあってよいはずだ。

ケアの視点からみるわたしたちの学びは、世界のなかで様々に相互依存しあうわたしたちの存在を通じたものであるために、自分のため、というよりも、わたしを含めた人びとが、より善く生きる方法を探ることへと繋がっていく。それは、自身の学びを他者と共に享受する喜びにもなるはずだ。TC

おかの・やよ
1967年生まれ。同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授。専攻は西洋政治思想史・現代政治理論。著書に『フェミニズムの政治学――ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012年）、『ケアするのは誰か？――新しい民主主義のかたちへ』（白澤社、2020年）、共訳書にケア・コレクティヴ『ケア宣言：相互依存の政治へ』（大月書店、2021年）ほか

『tattva』

Vol.5
Apr. 2022

Publisher/Art Director　尾原史和

Editor in Chief　花井優太

Editors　小山田裕哉
村上広大
稗田竜子
肥高茉実
平岩壮悟
鷲尾和彦
小渕 翔

Designers　横山 雄
大橋悠治
福田拓真
加藤 玲

Public Relations Staff　大槻将之
久々江美都
中山真弓

Cooperation Staff　小林淳貴

Production Cooperation　SIGNING Ltd.

Printing and Binding　株式会社八紘美術

Publishing House　株式会社ブートレグ
162-0802 東京都新宿区改代町40
Tel 03-5738-8921
edit@bootleg.co.jp

©2022 BOOTLEG Ltd.
ISBN：978-4-904635-75-9 C0030
Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています
価格は表紙に表示してあります
落丁本・乱丁本に関してのお問い合わせは出版元までお願い致します

株式会社ブートレグではグラフィックデザイナーを募集しています。詳細は右記 QR コードにて